

抄録

# 頭部外傷後に多発したうっかりミス (action slip) に対する リハビリテーションの検討

## Rehabilitation in mild traumatic brain injury with action slips

中島明日佳<sup>1)</sup>, 船山 道隆<sup>2)</sup>, 中村 智之<sup>1)</sup>, 稲葉 貴恵<sup>1)</sup>

**Key Words** : 軽度外傷性脳損傷, action slip, スキーマの活性化

### はじめに

頭部外傷後遺症では洗濯機に入れるべき洗濯物を思わずゴミ箱に捨ててしまうような『うっかりミス』が目立つ例が存在する。このうっかりミスは注意障害やワーキングメモリーの障害という立場から説明されることが多い。今回われわれは、このうっかりミスを健常者にも日常的に出現するうっかりミスである action slip という概念から捉え、頭部外傷後遺症1例のリハビリテーションの方法を検討した。

した通り、健常者平均から2標準偏差 (2SD) まで低下している検査成績はなく、標準注意検査法の Symbol Digit Modalities Test と Paced Auditory Serial Addition Test の低下を認め、注意の配分ないしはワーキングメモリーの低下を反映する成績であった。うっかりミスの頻度を自己記入式の質問紙である Cognitive Failures Questionnaire (Broadbentら, 1982; 山田, 1991) を用いて同年代の健常男性10名 (30~39歳 平均33.1歳) と比較したところ、症例のZスコアは4.89と頻繁にうっかりミスを認める実態が明らかになった。

### 1. 対象と方法

#### a. 対象

症例は39歳 (事故当時33歳)、教育歴14年の男性である。自家用車運転中、時速約50kmの対向車と衝突し、頭部外傷、頸部骨折、鼻骨骨折、肋骨骨折にて他院へ救急搬送された。翌日まで意識障害 (JCS I-1) を認めたが、他の神経所見に異常はなく、保存的治療を行った。MRI T2\*画像では、右頭頂葉にびまん性軸索損傷による微小出血を認めた (図1)。退院後、ADLは自立し、仕事や家事もほぼこなすことのできる軽症例であるが、事故後に日常生活でのうっかりミス (表1) が目立ち、発症1年後に当院高次脳機能外来を受診した。

神経心理学的検査の結果を表2に示す。表2で示

#### b. 方法

Norman (1981) は普段の無意識に起こる慣習的な行為の中で行為を構成するプログラムをスキーマと呼び、スキーマが活性することで行為全体がなさ

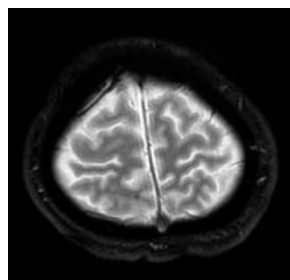


図1 MRI T2\*画像  
右頭頂葉にびまん性軸索損傷による微小出血を認めた。

1) 足利赤十字病院リハビリテーション科 Asuka Nakajima, Tomoyuki Nakamura, Yoshie Inaba : Department of Rehabilitation, Ashikaga Red Cross Hospital

2) 足利赤十字病院神経精神科 Michitaka Funayama : Department of Neuropsychiatry, Ashikaga Red Cross Hospital

れているというスキーマ活性化モデルを提唱した。すなわち、無意識に起こる自動化された行為を行う際、一連の行為全体（親スキーマ）のスキーマが活性化することで、適切なタイミングで自動的に多くの行為素（ひとつひとつの行為のイメージ、子ス

キーマ）が順序よく活性化されるというモデルである。具体例を図2に示す。その上で、彼はスキーマの活性が弱いと、うっかりミスがおこり、これをaction slipと捉えた。

われわれは本症例に生じたうっかりミスをもaction slipと捉え、スキーマの活性を促すリハビリテーションを実施した。具体的な方法は、まず、日常生活でのaction slipを詳細に記録させ、セラピストとaction slipの原因や背景を検証した。次に、行為素の言語化や代償手段を使用し、適切なタイミングで行為を構成する行為素、すなわち、子スキーマの活性を促した(表3)。

## 2. 結 果

症例とその家族は、以前と比べてうっかりミスが8割程度に減少したと感じている。具体的には鍵をリールでバッグにつなぎ、ドアの鍵を掛けるタイミングで鍵を取り出すことができ、外出時に鍵を忘れるうっかりミスがなくなった。また、コーヒーにミルクを入れる行為のひとつひとつの順序を言語化することで、ミルクをコーヒーに入れずに捨てる

表1 症例のうっかりミス

- ゴミと洗濯物を両手に持ち、ゴミと一緒に衣類をゴミ箱に捨てた
- 冷蔵庫をあけるつもりで戸棚を開け、冷蔵庫ではなくヨーグルトを戸棚に入れていた
- ご飯を茶碗によそる際に子供にコップを取ってといわれ、コップにご飯をよそった
- 卵を割って殻を捨てる行為を繰り返しているうちに、殻を捨てる場所に卵を割った
- コーヒーにミルクを入れようとして蓋を開け、ミルクをコーヒーに入れずに捨てた
- 自宅の鍵を持たずに玄関を出て、鍵を掛けようとして持っていないことに気づく
- 麦茶を作って冷蔵庫に入れたつもりが、麦茶のパックを容器に入れていなかった
- 子供の送迎の後、郵便局へ行く用事を忘れて家に帰ってきてしまう
- 自宅で何かを取りに他の部屋へ行くが何を取りに来たのかわからなくなる

表2 症例の神経心理学的検査の結果

知的機能	WAIS-III	VIQ85 PIQ98 FIQ90
記憶	WMS-R	言語性記憶 77 視覚性記憶 106 一般的記憶 78
行為	標準行為動作性検査	すべて正答
注意/遂行機能	Trail Making Test	A 64sec B 80sec
	標準注意検査法	
	digit span	順唱7桁 逆唱6桁
	tapping span	同順8桁 逆順7桁
	SDMT (Z-score)	-0.78
	PASAT (Z-score)	2秒条件 -0.99 1秒条件 -1.45

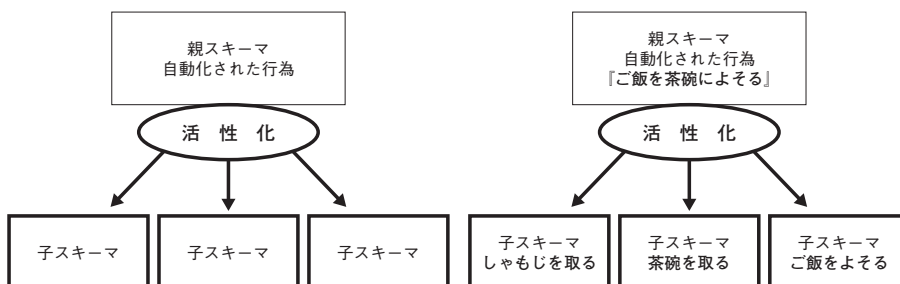


図2 Norman (1981) のスキーマ活性化モデル  
右は実際の行為をあてはめている。

表3 Action slipsに対する子スキーマを促すリハビリテーション

Action slips	子スキーマを促すリハビリテーション
ご飯を茶碗によそる際に子供にコップを取ってといわれ、コップにご飯をよそった	「コップとった、ここに置くよ」と行為を言語化し、子スキーマを適切なタイミングで活性化させる
コーヒーにミルクを入れようとして蓋を開け、ミルクをコーヒーに入れずに捨てた	「(ミルクの) 蓋を開けて、コーヒーに入れてから、捨てる」と言語化させることで無意識に起こる行為の順序を意識化させる
自宅の鍵を持たずに玄関を出て、鍵を掛けようとして持っていないことに気づく	鍵をリールでバッグにつなぎ、ドアの鍵を掛けるタイミングで鍵を取り出す子スキーマの活性化を促す
日常生活のミスがとにかく多い	携帯アプリの日記機能に文章と実際の写真を貼り付けミスを検証し、子スキーマを意識化させることで同じ『ミス』の繰り返しを防ぐ

うっかりミスがなくなった。他の行為にも実況中継するかのように言語化するようになり、うっかりミスが減少した。

### 3. 考 察

うっかりミス (action slip) に対して、注意の概念からは、行為を行う際に時間を十分に確保する time pressure management などが提唱されているが、行為素の活性化を促すリハビリテーションも有

効な可能性がある。

### 文 献

- 1) Broadbent, D. E., Cooper, P.F., FitzGerald, P., et al. : The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology*, 21 : 1-16, 1982.
- 2) Norman, D. A. : Categorization of action slips. *Psychological Review*, 88 (1) : 1-15, 1981.
- 3) 山田尚子 : CFQ (Cognitive Failures Questionnaire) に関する検討 (1). 甲南女子大学院心理学年報, 9 : 1-20. 1991.